「ラストピース」　第６話

水瀬真理佳

〈登場人物一覧〉

鈴木理菜（18）大学1年生

高橋湊（15）（18）（22）理菜のアパートの隣人

花村夏凛（18）理菜の親友

市川拓也（18）理菜の親友

西原圭吾（18）市川の友達

成宮翔（18）市川の友達

白水透（54）バーのマスター

佐々木俊哉（45）ニュースサイトの編集長

塚目凛子（34）護身術の師範

高橋正雄（62）（65）（69）高橋の叔父

竹内魁（29）高橋の兄

竹内早紀（40）高橋の母親

刑務官

店員

男子

先輩1

先輩2

社長

○刑務所・面会室

ガラス越しに仕切られた部屋で、高橋の叔父・高橋正雄（６９）と高橋の兄・竹内魁（２９）が座っている。

高橋正雄「具合はどうだ？」

竹内「はい。薬で痛みは感じないようにしてもらえてます」

高橋正雄「そうか……」

竹内「湊は元気にしてますか？」

高橋正雄「（言いづらそうに）実はな、湊はもううちにいないんだ」

竹内「（目を丸くして）そっか……アイツもう２３になりますもんね！　一人暮らしくらいしますよね」

高橋正雄「……５年前、書き置き残して出て行ったきりだ。でも、毎月俺の口座に決まった額を律儀に振り込んできやがるから、なんとかやってるんだろうが……すまない」

と、頭を下げる。

竹内、首を横に振る。

竹内「そうでしたか。きっと元気にやってるんですね。正雄さんには色々ご迷惑をおかけしました」

高橋正雄「これから心当たりを探そうと思う。必ず連れてくるから。だから魁、ちゃんとお前の口から話してやれ」

竹内、首を横に振って、

竹内「いいんです。湊には、このまま俺のことなんか忘れて、俺とは関わりのない人生を歩んで欲しいんです。アイツには幸せになってもらいたい。こんな俺が湊にしてやれるのは、それくらいなんで」

高橋正雄「そんなことは……！」

竹内、ゆっくりと首を横に振る。

刑務官「時間です」

刑務官が入ってきて竹内が立ち上がる。

竹内「わざわざありがとうございました」

と、高橋正雄にお辞儀。

高橋正雄も立ち上がる。

高橋正雄「早紀は最後までお前のことを信じ

てた。（問いかけるように）きっと湊も、そうなんじゃないのか？」

竹内、泣きそうになるのを堪えながら一礼して部屋を出ていく。

○三田大学・食堂

鈴木理菜（１８）、高橋湊（２２）、親友・花村夏凛（１８）が昼ごはんを食べている。

夏凛「ねぇ、haruka 先生って知ってる？」

理菜「聞いたことある。占いの人だっけ？」

夏凛「そうそう。私今ハマってるんだ～２人のことも占ってあげる」

と、スマホを取り出す。

夏凛「理菜の誕生日は、２００６年の２月５日、と……お、出た！　蒼のペガサスだって！」

理菜「蒼のペガサス？」

夏凛『物腰柔らかなあなたは、周囲に馴染むことがとても得意な人物。常にそばにいて

くれる人がたくさんいて、賑やかな毎日を送っていることでしょう』だって」

理菜「周囲に馴染むのが得意かは分かんないけど、確かにいつもみんながいてくれるから毎日楽しい！」

夏凛『蒼のペガサスは基本的にしっかり者ですが、たまに天然な一面を発揮することも。そんなチャーミングさが、周囲を惹きつけるのかもしれません』やっぱこれ当たってるよ！　理菜ってしっかり者だけど、結構隙もあるもん。ねぇ、湊くん」

高橋「それはある」

理菜「えぇ～!?」

夏凛「ちなみに恋愛はね、『蒼のペガサスは打算的な恋愛はしません。自分の気持ちが動く直感を大切にしますが、面倒見がいい年上に惹かれることが多いようです』だって」

と、ニヤニヤする。

理菜「面倒見がいい年上……」

と、復唱して、ふと高橋の方を見る。
目が合う２人。
夏凛「湊くんは？　誕生日いつ？」
高橋「２００１年の１１月１日」
理菜「１日って……来週じゃない!?」
高橋「（興味なさそうに）あー。そういえば
そうか」
夏凛「出たよ。黄金のワシだって。『鋭い着
眼点をもつのが黄金のワシの特徴。表には
ほとんど出しませんが、実は胸の内に熱い
思いを抱き、夢や目標のためなら時に手段
を選びません。クールな一匹狼タイプで、
大勢との馴れ合いを好まないと思われがち
ですが、実は人付き合いは嫌いではないの
かも』だって！」
高橋「全然当たってないな。鋭い着眼点とか
ないし、別に熱い思いも……」
理菜「そんなことないよ！　クールな一匹狼
っていうのも合ってる気がする」
夏凛「聞いて聞いて、湊くんの恋愛。『黄金

のワシは色恋には少し鈍感。しかし一度恋心を自覚すればもう止められません。持ち前の面倒見の良さで、年下とのご縁ができやすいです』だって」

と、再びニヤニヤする。

高橋と理菜、また目が合う。

高橋「ふ～ん」

理菜、ドキドキした表情で高橋を見つめる。

×　×　×

高橋「じゃあお先」

高橋、荷物を持って立ち上がる。

夏凛「バイバーイ」

高橋「今日バイト休みだよな？」

理菜「うん！　課題終わらせたくて」

高橋「暗くなる前に帰れよ」

理菜「はーい。バイト頑張ってね！」

と、手を振る。

高橋が去ってから、

夏凛「なんかいい感じじゃん２人。お似合い

だよ」
理菜「（照れくさそうに）そうかな？　普通だよ」
夏凛「ねぇ。湊くんの誕生日、何かあげたら？」
理菜「そのことなんだけどね！　みんなに声かけてうちで誕生日パーティーしようかなって思ったんだけど、どう？」
夏凛「いいね！　（遠くの方を見て）あ、噂をすれば。拓也ー！」
と、手を振る。
親友・市川拓也（１８）、同級生・西原圭吾（１８）、成宮翔（１８）がやってくる。
成宮「もしかしてここ空いてたりする？」
理菜「うん、いいよ」
成宮「ラッキー」
と、座る。
夏凛、全員が座ったのを確認して、
夏凛「はい、みんな座ったね」

西原「……なんか怖いんだけど」
市川「まさか金とんの？」
夏凛「私たちがそんな女に見える？」
　市川たち、顔を見合わせて、
市川と西原と成宮「・・・（満面の笑顔で）
　まさかぁ！」
夏凛「ねぇ、今変な間あったよ。どうする？
　この失礼な人たちは呼ばなくてよくない？」
理菜「ダメだよ。私たち２人じゃ寂しいもん」
　市川たち、頭にハテナマークが浮かん
　でいる。
理菜「実はね、湊くん来週誕生日なんだけど、
　うちでパーティーするのどうかなって」
　市川、顔が引きつる。
成宮「なんだそんなことか～！　もちろん行
　く行く。プレゼントも用意しないとな」
理菜「うん、そうしたい！」
西原「湊くん何歳になるの」
夏凛「２３歳」
　市川、盛り上がる４人を黙って見てい

る。
理菜「（伺うように）拓也も来てくれるよね？」
成宮「（女っぽく）来てくれるよね？」
と、ぶりっ子の顔で市川に顔を近づける。
市川、嫌そうな顔で成宮を押し返す。
理菜「（真剣に）拓也が来てくれたら湊くんも喜ぶと思うんだ」
成宮「ぷっ」
と、笑いを堪えて震える。
西原、苦笑して見守る。
夏凛「（ボソッと）やっぱりharuka先生の占いは当たってるわ～」
市川「（呆れて）どう考えても喜ぶわけないだろ」
西原「じゃあ拓也は行かないんだ。鈴木の家」
市川「（仏頂面で）……行かないとは言ってない」
夏凛「（笑いながら）なんなのよ」

理菜「（嬉しそうに）やった！　じゃあ湊くんに予定聞いてみるね！」
西原「プレゼントどうする？」
夏凛「湊くんって何が好きなの？」
理菜「お酒が好きかな。ウイスキー。めちゃくちゃ強いの！　全然顔も変わらないし、酔ったとこ見たことない」
成宮「５人いるし結構いい酒買えるよな」
市川「でも俺ら年確されたら終わるだろ」
夏凛「そうじゃん」
西原「ネットで親のカード使えばいいんじゃん？」
成宮「さすが圭吾！　賢い」
理菜「じゃあ私マスターにおすすめのお酒聞いとく！」
夏凛「あとはケーキと、ピザとか頼む？」
成宮「俺ら飲み物とか買ってくよ」
西原「ボードゲームとかあったら面白そう」
市川「……うちにあるから持ってく」
理菜「（嬉しそうに）ありがとう」

市川、まんざらでもない顔。

○アパート・理菜の部屋の中（夜）

理菜、机でパソコンを開いて課題をしている。

外でバイクが止まる音がして反応する。

○同・正面（夜）

高橋、バイクを止めてヘルメットを脱ぐ。

理菜の声「湊くん」

高橋、顔を上げると２階の共用廊下から理菜が手を振っている。

高橋、階段を上る。

理菜「（嬉しそうに）おかえり」

高橋「ただいま。（目を細めて）まさかこんな時間に出かけんの？」

理菜「（慌てて）違うよ。バイクの音聞こえたから出てきたの。湊くんに伝えたいことがあって」

高橋「伝えたいこと？」
理菜「湊くん11月1日空いてる？　空いてるよね、絶対空けといてね！」
高橋「（優しく笑って）それもう強制じゃん」
理菜「もしかして、予定入ってる……？」
理菜、心配そうに高橋を見る。
高橋「（口角を上げて）空いてる。何かしてくれんの？」
理菜「んふふ。それは当日のお楽しみ」
高橋「分かった。楽しみにしとく」
理菜「約束ね」
と、小指を差し出す。
高橋、自分の小指を理菜の小指に絡める。
理菜「指切りげんまん嘘ついたら針千本のーます」
理菜と高橋「（ハモって）指切った！」
〇百貨店・メンズフロア
メンズの服や雑貨、アクセサリーの店

が並ぶフロア。
理菜、難しい顔をして商品を見て回る。
理菜M「わ、分かんない……２０代の男性って何あげたら喜ぶんだろう……」
理菜、肩を落として歩いていると、ショーケースに入ったピアスに目が留まる。
引き寄せられるように近くで見る。
目を輝かせて、
理菜M「これ絶対湊くんに似合う」
店員「どなたかにプレゼントですか？」
理菜「はい！」
店員「シンプルなデザインなので、普段使いからお出かけまで幅広くお使いいただけますよ」
理菜、頷きながら話を聞く。
○バー・店内（夜）
マスター・白水透（５４）がカウンターの内側でシェイカーを振り、中身を

グラスに注ぐ。
白水「はい、マルガリータお願い」
理菜「はい」
理菜、マルガリータを客へ持っていく。
戻って来て、
理菜「マスター」
白水「ん？」
理菜「実は湊くんの誕生日に大学の友達とお酒をプレゼントする予定なんですけど、おすすめの銘柄とかありますか？」
白水「んーそうだねぇ。湊はシングルモルトウイスキーっていう、少しクセのある種類が好きかな。例えばこれとかね」
と、並んだ瓶の中から1本を取り出す。
理菜「おぉ～！」
白水「12年ものとか種類も値段も色々だけど、アイツは何もらっても喜ぶよ」
理菜「ありがとうございます。マスターに聞いて良かった～」
店の扉が開き、帽子を目深にかぶった

高橋正雄が入ってくる。
理菜「いらっしゃいませ」
高橋正雄、帽子をとって白水にお辞儀する。
高橋正雄「こんばんは」
白水、呆気に取られて、
白水「高橋さん……？」
理菜M「高橋？」
と、白水と高橋正雄を交互に見る。
高橋正雄「お久しぶりです」
と、深々と頭を下げる。
白水「理菜ちゃん。外の看板 closed にしてきてくれる？　少しの間ここ頼むね」
理菜「は、はい！」
白水、高橋正雄を連れて奥の部屋に消える。
〇同・バックヤード（夜）
白水と高橋正雄が対角線になるようにソファに座る。

白水「どうぞ」
　と、水の入ったグラスを差し出す。
高橋正雄「突然押しかけてすみません。先生はここだと聞いて……」
白水「先生だなんてやめてください。今はなんてことない、ただのバーテンダーですから……」
高橋正雄「もう弁護士の方はされていないんですか？」
白水「えぇ……あれ以来もうほとんど」
高橋正雄「そうなんですね」
白水「それで、私に何かご用でしょうか？」
高橋正雄「実は湊の兄・魁のことなんですが……」
　白水、ごくりと唾を飲み込んで、
白水「えぇ……」
高橋正雄「（言いづらそうに）ガンが見つかって、余命数ヶ月と、言われたそうです」
白水「え……」
　と、絶句する。

高橋正雄「魁はこのまま1人で死ぬつもりです。湊にも伝えるなと言われました。でも湊にとって魁はこの世にたった1人の血を分けた兄です。アイツには知る権利がある。俺はそう思ってます」

白水、苦悶の表情で話を聞く。

高橋正雄「でもうちを出たきりアイツが今どこで何をしているか分かりません。先生なら何か知ってるんじゃないかと思ってここへ来た次第です。先生、湊がどこにいるかご存知ですか？」

白水、黙って頷く。

白水「湊は今、仕事を掛け持ちしながら大学に通っています。ずっとあの事件の真犯人を追って」

高橋正雄「（驚いた顔）そうでしたか」

白水「ただ、正直この9年、進展は何もありません。魁くんの余命が実際にどれほどのものかは分かりませんが、もし数ヶ月だとすれば、タイムリミットまでに冤罪を晴ら

すことはおそらく……」

高橋、頷く。

白水「魁くんのことを知れば、湊はこれまで以上に冤罪を晴らすことに囚われて、どんな無茶をするか分りません。それだけが少し気がかりではあります……」

高橋正雄、深く頷いて、

高橋正雄「湊はきっと心のどこかでは、魁の無実を信じているだろうと思っていましたが……まさか真犯人を追っていたとは」

白水「でも高橋さんの仰るように、湊には知る権利があるのも事実です。実は病気だったなんて後から知らされても、納得なんてできるわけない」

高橋正雄「そうですよね……」

白水「とりあえず、湊に会って行きませんか？　実はこの後店に来る予定で」

高橋正雄、首を横に振って、

高橋正雄「いや。やめておきます。元気でやってるならそれでいいんです」

白水「そうですか……」

○同・店内（夜）

白水と高橋正雄が店内に戻ってくる。

白水「また連絡します」

高橋正雄「どうかこれからもアイツのことをお願いします」

と、お辞儀して店を出ていく。

理菜、不思議そうな顔で見つめる。

白水「理菜ちゃんありがとうね。ちょっと早いけど今日はもう上がっていいよ。湊が迎えに来るまで何か飲む？」

理菜「いえ！　ちょっとコンビニに行きたいので大丈夫です！　お疲れ様でした」

○駅前・ロータリー（夜）

ロータリー中央のベンチでコーヒーを飲みながら座っている高橋正雄。

理菜、近づいて、

理菜「あの。さっきバーにいらした方ですよ

ね？」
高橋正雄「あー！　あのお嬢さん」
理菜「誰かと待ち合わせですか？」
高橋正雄「夜行バスを待ってるんだ」
　理菜、高橋正雄の隣に座って、
理菜「夜行バス？　遠くからいらっしゃったんですね」
高橋正雄「長野からな」
理菜「私、長野出身なんです！　古諏訪って分かりますか？」
高橋正雄「古諏訪か。いい街だな。俺は北諏訪だよ」
　理菜、目を丸くする。
理菜「お隣ですね。もしかしてどこかで会ってたりして」
高橋正雄「そうかもしれないな」
　理菜のスマホに高橋から着信がくる。
理菜「ちょっとすみません」
　と、立ち上がり数歩離れる。
理菜（電話）「ちゃんと待ってるから大丈夫

だよ。うん、湊くんも気をつけて来てね」
高橋正雄、「湊くん」に反応して顔を上げる。
理菜、電話を終えて戻ってくる。
高橋正雄「迎えの人か？」
理菜「はい！　もうすぐ着くって」
高橋正雄、立ち上がる。
高橋正雄「俺もそろそろ行くよ。話し相手になってくれてありがとう」
理菜「またぜひお店にも来てください！」
と、見送る。
理菜M「確か湊くんも北諏訪って言ってたよね……」
×　×　×
理菜、ベンチに座ってスマホを見ている。
高橋「コンビニで待ってろって言ったのに」
理菜が顔を上げると高橋の姿。
理菜「あ……いやさっきまでね、バーに来たお客さんも一緒だったの」

高橋「お客さん？」
理菜「高橋さんっていうおじいさんがマスターに会いに来たの。マスターの知り合いみたいなんだけど、湊くんも知ってる？」
高橋、目を見開いて、
高橋「（真剣に）その人なんで来たの？　なんか言ってた？」
理菜「私は何も……ただ、これから夜行バスで長野に帰るって」
高橋「そうか……」
と、ただならぬ様子。
理菜「湊くんどうかした？　大丈夫？」
高橋「なんでもない。ごめん帰ろ」
理菜と高橋、歩いていく。
建物の影から２人を見る高橋正雄。
高橋正雄「立派ンなったなぁ……」
と、呟く。
○アパート・２階共用廊下（夜）
ドアの前で、

理菜「迎えに来てくれてありがとう」
高橋「いいよ。どうせ帰り道一緒だから」
理菜「（口角を上げて）おやすみ」
と、部屋の中に入る。
高橋「おやすみ」

○同・理菜の部屋の中（夜）
理菜、ドアを閉めて玄関に立ち尽くす。
理菜「湊くん、なんか変だったな……」
その時、外からバイクのエンジン音が聞こえる。
理菜、ドアを開けて外に出る。

○同・2階の共用廊下（夜）
理菜、1階の駐車スペースを見下ろすと、高橋のバイクがなくなっている。
理菜「湊くん……」

○大通り・車道（夜中）
高橋、ほとんど車の通っていない車道

をバイクで走る。

○（高橋の回想）中学校・教室（朝）

高橋（１５）、スクールバッグを肩にかけて教室に入ってくる。

クラスメイトは高橋を見ながらひそひそ話す。

高橋が自席の椅子を引くと、机の中から菓子や飲み物のゴミが溢れてくる。

高橋がクラスメイトを見ると、クラスメイトは目を逸らしてそれぞれの会話に戻る。

男子「よく学校なんて来れるよな。人殺しの弟～」

と、わざと大きい声で会話。

高橋、机の上で拳を握りしめ、ダンと机を叩いて立ち上がる。

静まり返る教室内。

高橋、何も言わずに教室を出ていく。

高橋Ｍ「例の事件以来、学校生活は散々だっ

た。それで懲りたはずなのに、もしかしたら何かが変わるかもしれないと、そんな淡い期待をもって、俺は高校受験をした」

○（高橋の回想）高校・門の前

【入学式】と書かれた立て看板。

○（高橋の回想）同・教室内（夕方）

生徒たちが鞄を持って教室を出て行く。

高橋、自席の前に立ち尽くす。

机には【サイコパスの弟】【社会のゴミ】【死ね】などの言葉が彫られたり落書きされている。

リュックサックを取ろうとするが、机の横にかかっていない。

教室を見回してもどこにもない。

○（高橋の回想）同・ゴミ回収場所（夕方）

高橋がゴミ箱の中を漁ると、中からリュックサックが見つかる。

取り出すと、ゴミで汚れていて、白い文字で【犯罪者の弟】と書かれている。

高橋M「家からだいぶ離れた高校なら、俺のことを知ってるやつもいない……なんて思った自分がバカだった」

高橋、リュックサックにホースで水をかけ、タワシでこする。

○（高橋の回想）高橋家・正面（夜）

高橋、自転車で帰ってくる。

所々塗装がはげている平屋の木造住宅。

高橋M「ターゲットが俺だけならいくらでも我慢できた。でも……」

高橋、郵便受けを見るとチラシに混ざって【出ていけ】【人殺し】と書かれた紙が入っている。

高橋、紙をビリビリに破く。

○（高橋の回想）同・居間（夜）

座布団に座り、ちゃぶ台で夜ごはんを

食べる高橋正雄（６２）と高橋。
真ん中にはトレーに入った惣菜。
高橋「俺、高校辞めて働こうと思う」
高橋正雄、おかずを取りながら、
高橋正雄「お前の人生だ。やりたいようにやってみろ」
高橋「うん……」
高橋正雄「どこか当てはあるのか？」
高橋「魁が働いてた車の整備工場に来ないかって言ってもらえてる。中卒でもいいって」
高橋正雄「（優しい顔で）そうか。良かったな」

○（高橋の回想）自動車整備工場・作業場
高橋（１８）、作業着を着て車の下で作業をしている。
先輩１「湊ー！」
高橋「はい！」
先輩１「昼にするぞ！」
高橋、車の下から出てきて、

高橋「（生き生きと）うす！」

○（高橋の回想）同・事務所内

作業着を着た社員たちがお弁当を食べている。

その中には高橋の姿も。

先輩1「ほら湊、これも食え」

と、肉を高橋の弁当に載せる。

先輩2「そうだぞ。若いんだから、もっと食え」

と、野菜を乗せる。

社長「お前は嫌いなもん食わせたいだけだろ」

みんなに笑いが起きる。

高橋も楽しそうに笑う。

○（高橋の回想）同・廊下（夜）

事務所の電気がついている。

高橋、暗い廊下を進む。

事務所内から話し声が聞こえてくる。

先輩1「三光さんが、納品は今回限りにした

いと……」
社長「そうか……」
先輩２「社長、これで３社目ですよ！　どうにかしないとこのままじゃ……」
社長「分かってる」
先輩２「まだあの事件の影響なんでしょうか……」
社長「事件がなんだってんだ！　湊はなんにも悪くないんだ。俺は魁だって無実だと思ってる！　あんなの冤罪だよ！！」
と、声を上げる。
先輩１「それは俺らだって一緒です！」
先輩２「魁が殺人犯だなんてありえない！」
社長「くれぐれも湊には気づかれないようにしろよ。アイツ、責任感じるから」
先輩１「はい」
高橋、今にも泣きそうな顔で壁に寄りかかって話を聞いている。
高橋Ｍ「俺がいると、優しくしてくれる人にも迷惑がかかる。この世に俺の居場所はは

いんだと思い知った」

○（高橋の回想）高橋家・居間（夜）

高橋正雄（６５）、部屋の電気をつける。

ちゃぶ台の上には【おじさんへ】と書かれた手紙。

高橋正雄、手紙を読む。

手紙には【お世話になりました。金は一生かけて返します】と。

高橋正雄「バカヤロー」

と、呟く。

手紙を持つ手は震えている。

○バー・店内（深夜）

白水、カウンターに肘をついて座り、険しい表情で考え事。

扉が開いて高橋（２２）が入ってくる。

白水「どうしたこんな時間に」

高橋、問い詰めるように、

高橋「今日叔父さん来たんですよね？　なんで？　何しに？」
白水「なんでそのこと……あぁ、理菜ちゃんか」
高橋、急かすような目で白水を見る。
白水「たまたま東京に来る用事があったんだと。それでもしかしたらお前に会えるかもと思って寄ってくれたんだよ。家出たきり顔出してないんだって？」
高橋「……」
白水「自分が帰ると迷惑かけるとか思ってんだろ」
高橋「……別にそんなんじゃ」
白水「なら顔くらい見せてやれ。心配してたぞ」
高橋「……」

○アパート・高橋の部屋の中（朝）
高橋、頭の後ろで両手をクロスさせ、じっと天井を見つめている。

目にはクマができている。
スマホのアラームが鳴り、ベッドから起き上がる。
母・竹内早紀（４０）の遺影を見つめる。

○同・２階の共用廊下（朝）
理菜、部屋のドアを閉めて鍵を閉める。
高橋の部屋のドアも開いて高橋が出てくる。
理菜「おはよ！」
高橋「……おはよ」
一緒に階段を下りる。
高橋、バイクの方に行く。
理菜「あれ？　バイクで行くの？」
高橋「ちょっと長野行ってくる」
理菜「（心配そうに）え、今から!?」
高橋「すぐ帰ってくる」
理菜「わ、分かった……」
高橋、ヘルメットを被ってバイクのエ

ンジンをかける。

理菜「気をつけてね」

高橋「ありがと」

高橋、バイクで出発する。

理菜、心配そうに背中を見送る。

○高橋家・正面

高橋のバイクが家の前に停まる。

呼び鈴を押すが誰も出てこない。

高橋、しゃがみ込んで玄関脇の鉢を見る。

錆びついた鍵が土の表面に置いてある。

高橋「まだあんのかよ。不用心だな」

と、苦笑。

鍵で引き戸を開けて中に入る。

高橋「叔父さん？」

と、中に向かって声をかけるが、部屋の中は暗く誰もいない。

高橋、家に上がる。

○同・居間

高橋、居間の電気をつける。

荷物を床に置いて座布団の上に座る。

ちゃぶ台の手紙が目に留まる。

送り主は竹内魁。

高橋、封筒から手紙を取り出して読む。

○同・玄関

高橋正雄、扉に鍵を差し込んで回すが、鍵は開いている。

不審そうに扉を開けると、玄関にはスニーカーが一足。

誰が来ているか察する。

○同・居間

高橋正雄、座布団に座る高橋を見て、

高橋「帰ってたのか。よく覚えてたな鍵の場所」

高橋、立ち上がり

高橋「これ、どういうこと？」

高橋の手には手紙。

高橋正雄「……書いてある通りだ。もう長くないらしい」

高橋「会ったの？」

高橋正雄「この間会いに行ってきた。こんな手紙だけ寄越されたってたまんねーからな。お前には言うなって頼まれたんだけどな」

高橋「マジで……ふざけんなよ魁……」

と、手紙を握りしめる。

高橋正雄「会いに行くか？　魁に」

高橋、唇を噛み締める。

（了）